関西企業ヒストリア Over 70

『関西企業ヒストリア』
～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取りあげ、
時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた
強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

第45回 創業 1930年（昭和5年）
株式会社 ミズホ

日本の砥石工業が躍動を開始 歴史をともに刻む朋輩に出会う

1920年▶ 19世紀後半に人造砥粒（炭化けい素・アルミナ砥粒）が発明され、アメリカにおいてビトリファイドボンド砥石として製造開始されたのが、人造砥石の始まりです。その後、日本では日露戦争後の明治末期に輸入され、その性能に驚嘆したと言われています。1908年頃に、この技術を源流として日本の砥石工業は躍動を開始しました。大正初期、わが国の重工業は第1次世界大戦（1914-1918）を契機とし急速な発展をとげ、それに伴って人造砥石の需要も急激に増加、日本各地に砥石メーカーが創設されました。

アメリカ製砥石の大量流入と、国内の激しい競争とあいまって、大戦後の深刻な試練を経て、ようやく砥石の生産も上昇カーブをたどり出した1920年、現㈱ミズホの創業者である森山國松は、当時の研磨業界の雄、大阪新町の芦傳一商店に入店。同店の扱う輸入研削砥石、自社製砥石を主に砥石に接すること10年、研鑽努力を重ねました。この間同店にて、外国砥石を目標基準として、国産化を図り製造、研究を重ねる川上源作と知り合い、互いにその熱心さを認めながら懇意となり、後の永い砥石との歴史をあ・うんの呼吸でともに刻むこととなります。

■初代社長　森山 國松

■初代専務　川上 源作

大阪市玉造にて創業し、研削砥石の販売を開始

1930年▶ 研鑽努力の結果、森山國松は大阪市玉造にて森山國松商店の看板を掲げ、自営の道を進むことを決意しました。研磨砥石、研磨機等の販売よりスタートするも、販売のみに止まらず、製造に対しても意欲を燃やし続け、小物砥石の製造に着目し、自宅横の空き地で、小物砥石の製作研究を始めました。川上源作に技術援助を依頼し、その後数年にわたり指導を受けることとなります。

1933年、現在の㈱ミズホ京都工場の地にて、研磨砥石の製造を開始、と言ってもトタン屋根の30坪位の小さな工場でした。当時は寺田村で、現在の城陽市のごとく住宅はほとんどなく、工場周辺は竹藪ばかりで、横には墓地だけという寂しい地でした。

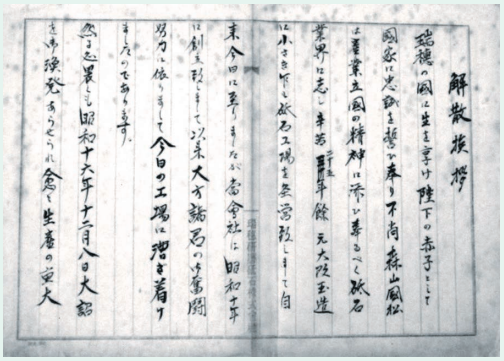
1933年頃の工場

1939年、森山國松を初代代表取締役として、瑞穂研磨砥石㈱を設立しました。1930年には世界恐慌が日本にも波及、銀行、企業が倒れ、失業者が世にあふれました。しかしなが

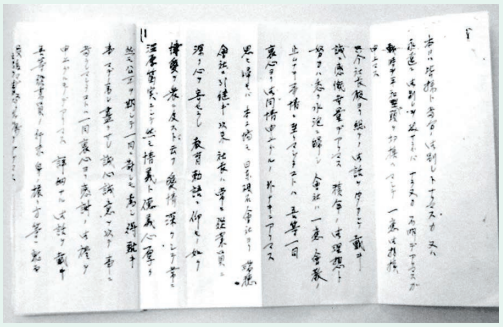
ら、当時日本はアジアでの工業国としての地位を確立させるため、重工業の発展に力を注いでいたこともあって、1944年までは砥石の生産量は前年を下回ることはありませんでした。

終戦後、生産の見通したたず一時閉鎖

1945年▶ 1945年8月15日終戦を迎え、関西では年に僅かな休日の一日、お盆休みのため工場は休日で、朝からうだるような暑さでした。これまで納品先はすべて軍需工場行きでしたので、翌日からは生産の必要がなくなりました。半製品を製品にするだけにして、工場内外を整理整頓することとなりました。今後の生産見通しもなく一時閉鎖の止む無き事態にいたりました。創業より15年、波瀾の年月でしたが、つねに精密研削砥石製造の方針は変わることはありませんでした。9月15日、工場の一時閉鎖の日に解散式を行いました。森山國松社長より、従業員の人々に感謝をこめての惜別の挨拶。また、川上源作専務より、煙突から煙が出せなくなった、悲しみを込めての挨拶。その場にいた者全員涙し、悲壮なお別れでありました。



森山國松社長　工場解散挨拶文　原本


川上源作専務　工場解散挨拶文　原本

同日を境として翌日16日から事務所も工場内部もガランとして人の気配はなく、残った幹部も砥石を作る必要もなく、まず食糧と工場の空き地で畑づくりが始まりました。しかし、これが本業ではなく、電熱盤、碍子、タイル等を製造してはとの意見もありましたが、その道その道には、やはり色々と難しさもあることから、砥石は平和産業でも必ず必要なものであるとの判断にいたりました。その後、国内産業も平和産業に移り、ベアリングを始めとする産業界より砥石のニーズが高まり、再び砥石生産の途をたどることとなりました。

ここが転換点　ベアリングの精度を飛躍的に向上させる

日本初の超仕上砥石を開発

1952年▶ ベアリングは、第二次大戦中から、軌道面精度、保持器材料と精度、ラジアル内部の精度が音響に及ぼす影響が研究されていましたが、本格的に音響解析が始まったのは1950年頃からでした。当時のベアリング業界の技術指導を通商産業省機械試験所で行っていました。ボールベアリング軌道面の超仕上加工の開発に成功し、その後の日本のベアリング精度を飛躍的に向上させました。ミズホの砥石もその一翼を担い、大きく貢献しました。1952年には砥石業界で初の通産省助成金を受け、日本初の超仕上砥石を開発。ベアリングを始めとする精密機器類すべて、超仕上加工を施さないものは、製品として世界に通用しないとの観点からユーザーはミズホの超仕上砥石に注目し、受注が殺到し量産体制に入りました。

1955 年頃の超仕上砥石湿式撹拌機

ベアリング業界とともに発展・躍進へ

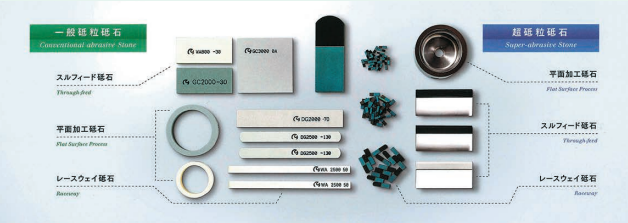
1960年▶ 1960年と1975年の砥石使用量の比較では、自動車向けでは3.2倍、ベアリング向けでは4.4倍と急上昇の時代でした。当時ミズホは全生産量の75％をベアリング業界向けとして出荷していました。ベアリングの精度の

要求はますます高精度となり、砥石への品質、品位の向上も求められ、納期、コスト、すべてにユーザーの要求は厳しさを増していきました。同社は躍進の一途をたどり、すべての部門で合理化は進み、工場は画期的な生産方式に移り変わるとともに、営業拠点も拡充されました。まさに企業基盤の形成がなされ大いに発展した時代でありました。

1973年から超砥粒砥石の生産ライン化を開始、1981年には本格的なものとなり、1989年2月には専門工場が整備竣工されました。製品開発においても1975年に国内で最初のCBNビトリファイド超仕上砥石の実用化について、技術誌「精密加工」5月号に松森昇取締役技術部長の執筆により論文が発表されました。1982年には「ビトリファイド窒化硼素砥石およびその製造法」が特許化されました。国内では二番目のCBNビトリファイド研削砥石の特許化でした。この種の砥石の特許は網の目のごとく張り巡らされており、これらに屈することなく、特許化に成功し、国内外の他社では真似のできない独自の砥石生産と輸出の拡大に努力をかさねました。

1991年4月瑞穂研磨砥石㈱は㈱ミズホに社名変更、カタカナ書きも「ミヅホ」から「ミズホ」へと生まれ変わりました。ミズホと字は変わっても、瑞穂の歩んできた歴史の良きところは大切にし、かつ土台にしながらも因習を破り新しい企業づくり、すなわち望ましいミズホの企業文化をつくり出すことを最も大きい意義としました。

現在の研削砥石・ラインナップ



現在の超仕上砥石・ラインナップ

2001年4月にISO9001を取得、精密砥石品質の安定向上と新製品の開発を積極的に推進し社会に専門メーカーとして、名実ともに“品質ミズホ”を旗印に貢献することを今後とも誓い、さらなる挑戦をしていくことを確認しました。

よりよい未来のために、新たな高品質を生み出し続ける

2005年▶ ミズホの砥石は、国内だけでなく海外にも活躍の場を広げ、2005年には中国・上海に現地法人「美世豪磨料磨具（上海）有限公司」を設立。超仕上砥石の製造販売を開始し、現在では出荷量の約4割を海外向け製品が占めています。安定した質の高さを誇る「ミズホクオリティ」は海外での評価も高く、今後さらなる海外拠点の拡大を模索しています。

ミズホテクニカルラボ

「開発型の製品づくり」をモットーとしている同社では、2011年には、未来を見据えたハイエンド製品の生産と新製品の研究開発拠点として、京都府木津川市にテクニカルラボを開設。より一層の高精度ニーズに応えるため、ダイヤモンドやCBNの砥粒を用いたハイエンド製品の開発・生産に注力しています。

世の中の環境負荷を減らし、暮らしの快適性を高めるために、ミズホの「マサツ」との戦いは終わることなく続きます。

株式会社 ミズホ
本社所在地：大阪市西区新町 1-9-18
従業員数：256名　**資本金**：4,500万円
事業内容：研削砥石、超仕上砥石、ホーニング砥石、軸付砥石、CBN 砥石、ダイヤモンド砥石ほか研削・研磨・作業周辺機器および諸材料全般の開発・製造・販売